［第十二話］

山岡鉄舟

山岡鉄舟は本名小野鉄太郎といい、天保七年（一八三六）江戸に生まれ、父が飛騨高山の代官となったため、今の岐阜県高山市で育ちました。剣道と書道に励んだこの時期、十五歳でつくった「座右銘」があります。

「一、嘘言うべからず」に始まる二十か条から、ほかに三つほどあげてみます。

「十六、何時何人に接するも、客人に接するように心得べく候」

「十七、己の知らざる事は何人にてもならうべく候」

「十九、人にはすべて能不能あり、いちがいに人をすて或はわらうべからず候」

――いつどんな人に接する場合も、お客に接するような気持ちで、丁寧に。自分の知らないことは、だれにでも習うようにしよう。人にはできることと、できないことがある。なにかができないからといって、その人はだめだときめつけ

たり、あざ笑ったりしてはならない。

少年時代からこの心がまえで修養努力したからこそ、あの西郷隆盛を驚嘆させるほどの大人物になったのだと思われます。

大政奉還のあと、第十五代将軍慶喜は江戸に帰り、上野の寛永寺で謹慎していますが、官軍は東海道を攻めよせてきます。慶喜の戦争を避ける気持ちをなんとか官軍にわかってもらいたく、慶喜は鉄舟を派遣することにしました。

鉄舟は殺気だった官軍のなかを馬で突破し、静岡で官軍の司令官である西郷に会見し、命がけで話をまとめました。

西郷はこの会談のあと「いや、えらい人物に出会うものでごわす。命もいらぬ金もいらぬ、名もいらぬというような者は始末に困るが、あげん始末に困る御仁（お人）でなくては、ともに天下を語るわけにはまいりもはんど（一緒に日本国のことを相談するわけにはまいりません）」と激賞しました。

ふたりのおかげで江戸城総攻撃は避けられ、危うくフランスかイギリスの植民

地になりかねなかった、日本の運命は救われたのです。

鉄舟は、自分の槍の師であった山岡静山が急死したため、山岡家を継ぐことになり、二十歳のとき小野姓から山岡姓に変わりました。

「わたしのおむこさんは、鉄太郎さんでなくては絶対にいやです」といって、鉄舟を迎えた十六歳の少女英子は、ひどい貧乏のなかで、たくさんの弟子たちを養い、家を守り、国事につくす鉄舟をささえた賢夫人となりました。

鉄舟も鬼鉄といわれた豪傑でありながら、妻に優しい人で、妻に向かって大きな声を出したことなど一度もなかったそうです。夫が書道の名人ですから、英子も手習いをはじめますが、のちには鉄舟の手紙の代筆をして、もらった人が鉄舟本人の字と思ったくらい、みごとな筆跡となりました。

鉄舟の剣は無刀流、刀もいらない至高の境地に達します。書道は少年時代にすでに、弘法大師流第五十二世となった名人。禅の修行も悟りを開き、坐禅を組んだまま亡くなりました。職業や階層をこえた多くの人びとから慕われ、谷中の全

生庵墓地で、死後も夫人やたくさんの弟子たちに囲まれて眠る鉄舟です。

西郷の推挙で侍従をつとめ、まだ青年であられた明治天皇に仕え、最も御信頼の深かった人であります。

明治二十一年（一八八八）五十三歳没

○　高山市で育った鉄舟は〝郷土の英雄〟です。
　岐阜県人として誇りをもちました。
○　江戸城の明け渡しが、平穏に行なわれたのは、鉄舟の裏方での大活躍とは知りませんでした。
○　「命もいらぬ、金もいらぬ、名もいらぬ」は私のあこがれの生き方です。
（M生）